

「知」でつながる。 はじめめる。

人、モノ、知恵、文化、歴史、経済など…、さまざまなものがつながつて形成されている地域。もちろん、その「つながり」の環には大学も含まれる。その中で大学が果たすべき役割とは何だろうか。

「つながり」を研究することにより
人々や社会が抱える課題をすこしずつ解決でき、
明るい未来を切り開くことができるのではないだろうか。
「知」でつながることにより生まれる、希望。



岐阜大学地域科学部
地域政策学科教授
富樫 幸一

人と人の「つながり」を資本として地域が活性化し、
そこで育った人材が
別の地域でまた新たな「つながり」を生み出していく。
そして、
それは受け継がれ世界へ、未来へとつながっていく。
つぎることのない「つながり」の中で「つながり」を学ぶ。
学生たちは、果たして何を学べるのだろうか。
地域は、どう変わっていくのだろうか。
新しく何が生まれるのだろうか。
「つながり」に秘められた可能性は、無限に広がっている。

つながりは、無限。

つながりってなんだろう？

—— 人とまちをつなぐ

岐阜のまちづくりプロジェクトは、産官学の「つながり」から生まれた。1996年に地域科学部が開設され、2001年には岐阜県・岐阜市・十六銀行・岐阜大学などによる産官学連携から『ぎふまちづくりセンター』が誕生しました。「つながり」から始まった岐阜のまちづくりプロジェクト。今では「まちづくり」という言葉もすっかり浸透し、蒔いた種がさまざまな形で実を結びはじめています。

地域との「つながり」を見つめ直すことが、まちづくり研究の第一歩。

大学でまちづくりを研究する。実はこの第一歩は、地域と学生との「つながり」を再び見つめ直すことから始まります。子供会、町内会、社会科の地域学習など、小・中学までは地域と子どもは確かにつながっています。しかし、高校・大学受験を機に地元を離れ、地域との関係がいったん切れてしまう。それを再び結びなおすことから、まちづくりの研究はスタートします。自然、歴史、経済、文化。岐阜には取っ掛かりやすい研究テーマがたくさんあり、規模も

ほどよい。研究フィールドとして、とても魅力的な地域です。

大学は、人とモノと地域を結ぶ担い手であり、「つながり」の拠点でもある。

道を整備し建物を立てるには億単位の費用が必要ですが、ガイドブックなどのソフトならもう少し手軽に作る事ができます。実際に「いろんな人と話して、地域を知って、たくさんの人に魅力を伝えていこう」をコンセプトに『まちあるきマップ』などを製作してきました。そしてこれをさらに効果的なツールにするためにも、大学の「知」はとても役立ちます。たとえば中国語版を作りたくなくても大学から翻訳も担える。学部学科を越えて大学の「知」を有効に活かせる。これこそ大学の「知」の「つながり」の強みだと思います。また、この「知」をつなぐためには、人と人のつながりが大切です。岐阜大学から巣立っていった卒業生たちが、岐阜以外の地域でまちづくりと連携し、新たな「つながり」を生み出していく。そんな未来を切り開く担い手を輩出することも、大学の重要な役割だと考えています。

地域に寄り添う 大学だから できることがある。

大学を拠点にフィールドへ飛び出し、まちづくりの研究に取り組む富樫研究室。学生だからできること、岐阜だからできること、という視点から、その活動内容について具体的に伺いました。

—まちづくりを研究するうえで、岐阜ならではのメリットは？

「まちづくり」実習「研究」の3つが一体となっている岐阜は、学が「場」として最適な環境が整っていると思います。地元の方々が「地域活性化のために一緒にやろう」という気持ちを持ってくださっているので、調査や研究がとてもしやすい。ある町では「うちのまちづくりのキッカケは大学の調査だよ」と言われたこともあり、うれしかったですね。

—学生にも良い刺激になり、研究の質の向上にもつながります。

学生にも良い刺激になり、研究の質の向上にもつながります。

—商店街の活性化などに必要なものとは？

「まちづくり」実習「研究」の3つが一体となっている岐阜は、学が「場」として最適な環境が整っていると思います。地元の方々が「地域活性化のために一緒にやろう」という気持ちを持ってくださっているので、調査や研究がとてもしやすい。ある町では「うちのまちづくりのキッカケは大学の調査だよ」と言われたこともあり、うれしかったですね。

商店街のリノベーションでも大切なのは個性です。お金をだせばモノは買えるけれど、店主のユニークなキャラクターなどは、その店にしかない。足を運びたくなる個性と出会い、つきあっていくことが大切だと思います。小さくてもこだわりがあれば面

—若い学生だから気づくこととは？

若い学生だから気づくこととは？

若い学生だから気づくこととは？



いつもお世話になっているおふたりと川原町でパシャリ。玉井屋本舗社長で川原町まちづくり会事務局長の玉井博祐さん(右)と、NPO法人ORGAN理事長で長良川おんぱく実行委員会事務局長の蒲勇介さん(左)

“おつき合い”と“学び”のステキな関係



古今金華



わたしたちの子供の頃の金華の町

まちづくり、実習、住民の皆さんとおつき合い

地域科学部ではこの10年来、古い町家や町並みが遺る金華地区(旧岐阜町)で、山崎仁朗先生(社会学)や合掌頭先生(建築環境)、富樫(地理学)などが学生と地域学実習の調査をやらせてもらってきました。並行してぎふまちづくりセンターの月1回の景観サロ

書きとめられた「わたしたちの子供の頃の金華の町」の編集でも協力しました。

聞き取りやマップづくりを通じて地域を見直すところから始めて、町家の保存や高齢化などの課題を調査しています。大学側では教育と調査の意図があるし、まちづくり会はその結果を使えるわけで、いい関係ができています。こうしたことを通じて分かる大事な事は、まずは住みやすい、誇りをもてる地域にすること。訪れた人のだれもが町並みの中に入ると「ホッとする」川原町は、住民の皆さんが「心を一つに」して取り組まれ、大学も少しお手伝いさせてもらった町なんです。

地域再発見! それが「長良川おんぱく」



長良川おんぱく

—といっても初めて聞くという人もいるでしょうが、今年の秋はネットやメディアに広まりました。岐阜市には、長良川や金華山などの素晴らしい自然がいつも目の前に横たわり、道三と信長が整備した全国的にも早い時期の城下町以来の歴史を誇ります。それなのに「観光といえば高山」「岐阜には何もないから」とよく言わ

れましたが、そうはいわせたくない。今、観光はマスツーリズムから、友達や家族とゆっくり町をめぐり歩くエコツーリズムに、世界でも日本でも換わってきていて、岐阜にとっても伝統の鶴飼以外のチャンスが訪れています。岐阜大学の学生も「古今金華町人ゼミ」で自主企画したり、参加して自分たちも楽しんだ「長良川おんぱく」は、岐阜の魅力を見直すきっかけになったはず。